第4回原子力委員会
資料第2号

福島第一事故がもたらしたものと
福島再生・復興の意義

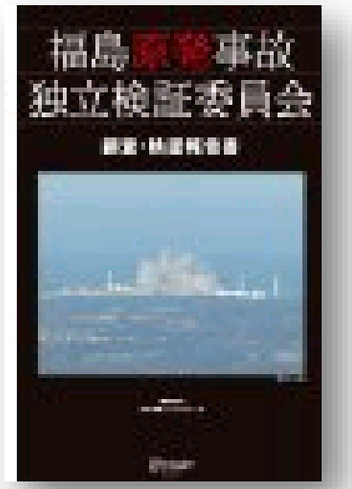
２０２１年2月１６日

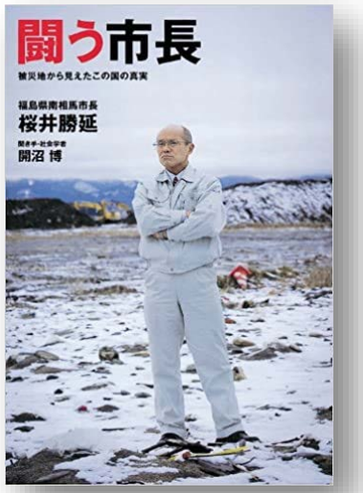
立命館大学　衣笠総合研究機構

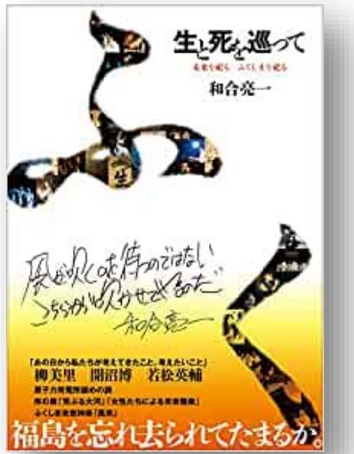
准教授　開沼博

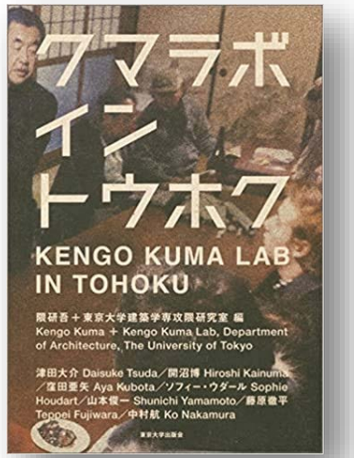
hiroshikainuma@gmail.com

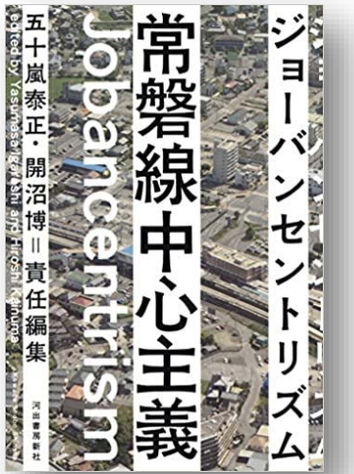
自己紹介











３．１１以前から福島とエネルギー・原子力との関係を人文・社会科学的に研究

- フィールド研究　被災地・被災者の内在的視点でのモノグラフ、量的手法を組み合わせた復興・廃炉の分析
- 歴史研究　エネルギーと福島、鉄道と地域史、オーラルヒストリー的研究
- 理論研究　内地植民地論、リスク社会論、過剰包摂論

＋　他分野（建築、医療、工学、文芸、映画、中等教育、基礎自治体・・）との学際的研究＆社会連携

結論

①福島第一の事故が地域や社会、国家に何をもたらしたのか
　ー潜在的課題（あるいは可能性）の顕在化・急加速
　ー合意形成・意思決定の混乱
　ー風評と事実共有の困難の露呈

②福島の復興・再生とはどのような意義を持つのか
　ー課題先進国の課題先進地に向き合う
　ー「情報災害」との対峙・克服

リスクとは？「復興・再生」とは？

http://www.asahi.com/gallery/hanshin20/kobe_nagata/kobe_nagata11.html

https://www.city.kobe.lg.jp/h53961/kuyakusho/nagataku/jyouhou/tetsujin8.html

日本は災害大国と言うけれども･･･

1930年　北伊豆地震

https://www.fnn.jp/articles/-/2742

2019年　大型台風

https://www.japanplatform.org/programs/reiwa-typhoon2019/

・リスクと危機

表面的に見てもわからないところにある危機

・危機の中の課題

二層構造:「固有の課題」と「普遍的課題」

・課題の解決

解決を阻む壁（忘却、コスト、担い手、発生確立低い、そもそも課題が課題と思われていない・・・）

=>それは「課題の解決」に向かっているのか？

家族や知人に
福島県産の食べ物を
福島県への旅行を
おすすめできる？

家族や知人に福島県産の食べ物をおすすめできる？

- 家族、子どもに24．2％

  友人、知人に23．5％

  が<u>放射線が気になるのでためらう</u>！

- 福島県内で聞くと、１－２割ぐらいに下がる

- 「気にしない」という人が63．4％・64．0％、「積極的に食べる・勧める」という人が12．4％・12．5％だが・・・

【以下、三菱総合研究所「福島県の復興状況や放射線の健康影響に対する東京都民の意識や理解度を把握するためのアンケート」第三回調査より
調査期間 :2020 年 7 月 22 日～27 日
調査地域（回答数）:東京都（1,000 サンプル）
調査対象 :20 歳～69 歳の男女
調査方法 :インターネットアンケート】

家族や知人に福島県への旅行をおすすめできる？

- 家族、子どもに２５．６％

  友人、知人に２４．０％

  が放射線が気になるのでためらう

- 「気にしない」という人が６１．０％・６２．７％、「積極的にすすめる」という人が１３．４％・１３．３％

- 観光客の数全体は回復傾向にある。ただ、来ている人の中にもためらいがないわけではない

「福島県内の現状を東京都民は正しく理解していると思う」か？

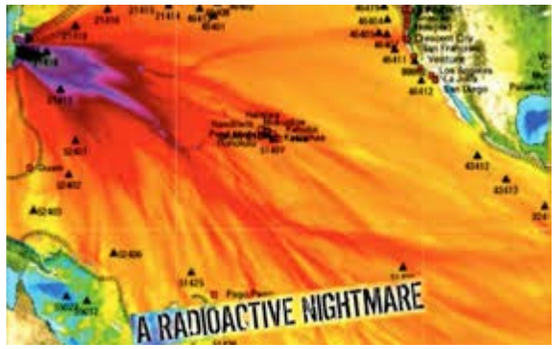
- 東京都民に聞くと「そう思う」「ややそう思う」は８．５％。

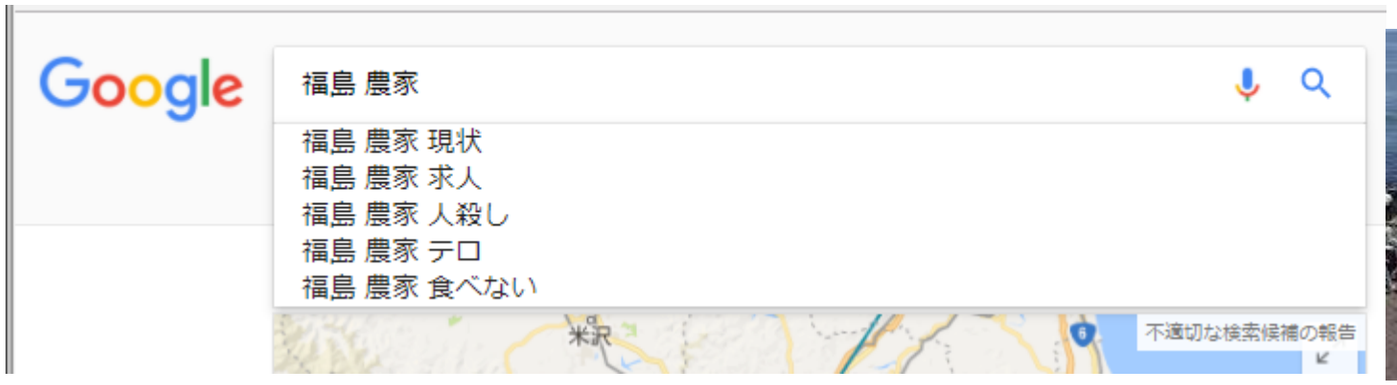
- 逆に「そうおもわない」「あまりそうおもわない」は４７．３％と「福島の状況を正しく理解できていないなー」という感覚が圧倒的に東京都民にあるということがある。

- マスメディアでも定期的に取り上げられてきたし、いろんな情報がながれてきたが「結局わかんないよね」という感覚ある

福島問題の語りにくさの壁

- 「福島への見方」ある企業CSR担当者との会話
  - 「リターン見えない」「不謹慎なことしそう」「手離れ悪い」・・一般的な認識
- 「福島問題」の前に積み上がってきた3つの壁
  - 福島問題の過剰な政治問題化
  - 福島問題の過剰な科学問題化
  - 福島問題のステレオタイプ化＆スティグマ（負の烙印）化





- 今必要なこと：データと理論＆「ローコンテクスト」化（数字・言葉の往復も）

Copyright (C) Kainuma,Hiroshi All Rights Reserved.

福島に残る課題

・被災者・地域の孤立と固定
　避難者・震災関連死・帰還困難区域・高齢者福祉・・・

・風評＝経済的損失　＋　差別・偏見

・風評等による経済的損失の継続
　被害は一次産業＋観光業に集中
　復興集中期間後の回復傾向鈍化
　＝「踊り場」感　＋　風評と産業基盤衰退の相互作用

・ポスト「放射線」問題
　作物の法定基準値超え無し・環境中の線量の減衰の中での高コスト維持への疑念
　健康影響確認による「不安」対策における「過剰診断」等の弊害の顕在化
　=>しかし県外等に伝わっていない

・ポスト「復興（バブル）」 と　避難地域の復興本格化
　予算縮小　＋　廃炉・イノベ・地場産業育成　＋　生活環境と研究・教育文化の整備

参照：開沼博『はじめての福島学』（イースト・プレス）　同・編『福島第一原発廃炉図鑑』（太田出版）
　　日本原子力学会・編『原子力のいまと明日』（丸善出版）

10年を俯瞰して（1）

福島第一原発事故の社会的影響、復興・再生の途中経過について、
総合的な検証が十分になされたと言い難い中、関わった
ー福島原発事故10年検証委員会（第二民間事故調）
ー東電福島原発事故自己調査報告（事故自己調）

- 対象・方法　ともに当時の諸々の意思決定やその後の運用に関与した政府・行政関係者、専門家への聞き取り
- 枠組　第二民間事故調は各事故調の再検証、事故自己調は「政策の意図と結果」のズレの検証
- 教訓　（同じ対象を見ているから重なりも大きい・・・）

１０年を俯瞰して（２）

第二民間事故調

ー
はじめに　「21世紀半ばにおける日本のあるべき姿」を目指す

1　被災の固定化と孤立化

2　放射線モニタリング

3 「1mSv／年という金科玉条」：除染と中間貯蔵施設

4　過剰診断

5　風評という曖昧な概念：風評被害対策

6　浜通りとイノベーション・コースト

7　ゾンビ化とエンドステート

まとめ

・初期の混乱の中でなされた決定が産む弊害をいかに是正するか

・実際に人命や人権を奪う結果につながってきた問題を、「優先順位の高い問題」としてアジェンダセッティングし、証明から向き合い、教訓とできるか

・科学的合理性と現実のズレをいかに埋めるか

・大規模な復興・廃炉関係の予算・事業を、単にそのためだけに費やすことに終わらせず、次につなげられるか

・合意形成・意思決定の棚上げによる事態の悪化をいかに避けるか

・政府・行政、自治体、住民をつなぐ専門家を育成・登用できるか

事故自己調

ー提言

1　科学が風評に負けるわけにはいかない。処理水の海洋放出を実行すべき

2　中間貯蔵施設には確かな希望がある。独り歩きした除染目標の１mSv

3　福島で被爆による健康被害はなかった。甲状腺検査の継続は倫理的問題がある

4　食品中の放射性物質の基準値を国際基準に合わせるべき

5　危機管理に対応できる専門家の育成は国家的課題

6　福島の決断も問われている。双葉郡を中心とした町村合併の検討を

ーまとめ

（1）危機の中で拙速に定めた「基準」が後々、大きな縛りとなり、それ自体が新たな被害を生み出すことを意識すべき

（2）長期大規模避難はまちの回復可能性をつぶし、人命を奪う

（3）葛藤を避けることを意図した「問題の棚上げ」が、事態を泥沼化させる

（4）政治が毅然としたメッセージを出すことから逃げない

（5）現場のリーダーの役割は未来を見せること

結論

①福島第一の事故が地域や社会、国家に何をもたらしたのか

ー潜在的課題（あるいは可能性）の顕在化・急加速

少子高齢化、医療福祉の危機、コミュニティの崩壊、既存産業の衰退、リスク社会化、外交・防衛・・・

ー合意形成・意思決定の混乱

処理水を皮切りにした廃炉廃棄物の管理・処分、中間貯蔵施設の除染土壌等県外搬出、甲状腺検査と自主避難の補償・持続の出口・・・

ー風評と事実共有の困難の露呈

②福島の復興・再生とはどのような意義を持つのか

ー課題先進国の課題先進地に向き合う

ー「情報災害」との対峙・克服の経験